

因伯昔話

特45
特45-876イ
1200800203997
876イ

あ
ろ
い



始



◀くろくも▶

- | | |
|---------------|----------------|
| 一 びば法師 (八頭郡) | 九 盗人の悔悟 (西伯郡) |
| 二 佐治谷の話 (八頭郡) | 十 夢 佛 (日野郡) |
| 三 大坊主 (氣高郡) | 十一 人形山 (東伯郡) |
| 四 赤松池物語 (西伯郡) | 十二 湖山長者 (氣高郡) |
| 五 經藏坊 (鳥取市) | 十三 人助けの熊 (日野郡) |
| 六 打吹山 (東伯郡) | 十四 千兩箱 (鳥取市) |
| 七 國分寺の犬 (岩美郡) | 十五 下女のね種 (岩美郡) |
| 八 をとん女郎 (氣高郡) | |

因伯昔話

◎ びば法師



今は昔 八頭郡池田村に國都といふ盲者がありま
した。ある時用事があつて都へ出やうと思ひ。道
を若櫻にとつて豹山にかゝりました。此盲者はか

ねて琵琶を弾ずることが嗜好でありましたが又其上手でもあり
ました。でありますから旅行するにも琵琶を袋に藏めて少しも
手離さないものであります。

さて此盲目の琵琶法師は杖を便りに豹山に上りましたが程な
く日が暮れて人の行き交ふ氣色もありません。所詮今夜は越

びば法師

因伯史話會選

182
内交

事は出来ない芝原に一夜を明かさうと此處に琵琶など下して
休息しました。

夜はだんぐと更け渡ります、谷川の音は潺湲と鳴つてゐま
す。どうやら月も出た様子山中の夜は又なく静であります。「
こんな夜、好きな一曲を弾いたら其技も神も入るだらう」と、
やをら琵琶をとり出して、調子を合せます、調子もやがて調ひ
ましたから、思ひ入つたる平家の一曲を弾きました。峰の夜風
は木々の梢に静な音を立てて琵琶の音に通ひ流れの水は嘈々の
絃の響と通つて、深山の夜更に、時ならぬ音曲を奏しました。
此時、向ふの山とも覺しき所から聲を掛けて

「ア、よく出来た〜。今一曲、高野の巻を弾かれよ」
といふものがありました。國都は此深山に今時人が居ようとは

夢にも思ひません。しかし音曲には不思議はあるものだと思つ
て

「それは容易い事、語りませう」
と、更に一段の調子を仕替へて一曲を語り畢りました。

國都は自ら満足したと云ふ状で琵琶を藏め静に睡眠らうと思
つておますと、突然に老人が現はれまして、静に

「今の曲は眞實よく出来た、これから後、今の心掛を忘れ
ぬやうにしたら屹度上達する、今夜は宿る所もあるまいから此

馬に乗つて早く播磨の方へ越しなさい。」
と親切に云つて一疋の馬を牽いて来て與へました。

琵琶法師の國都は「有り難う〜」と再三禮を述べて、其馬
に乗りました。間もなく馬は進み出して其鈴の音がナリン〜

と鳴つてゐます、誰とも知らず馬の口を取つてはや豹山を越に麓をさして下つて行きました。

する中に夜もだん／＼明方近く寄りました。もはや此處は播磨の戸倉といふ所であります。國都は「さても良い都合で夜の間、峠を越した。ここまで来ればモウ大丈夫」と思つてゐますと、路傍に子供の聲がして

「アレ御覽、盲者が狼に乗つて来る。オヤ狐が其口を取つてゐる」

と云ひました。ところが急に國都の馬は跳ね出して國都を振り落して了ひ、口をとつてゐた者も逃げてしまつて、いくら探しても居なくなつてしまひました。

國都は不思議の事に思つて此事を村人に話しましたら、村人

は「それは多分山の神様のなされた事であらう」と感じあつたと云ふ事でありませう

◎佐治谷の話

今は昔八頭郡佐治谷といふ山奥の村がありました。此處の人は至つて正直でありましたから時には正直すぎて馬鹿正直であつた事もあつたのであります。

ある佐治谷者の親類に不幸がありました。其葬式をせねばならぬと云つて種々と手配をしてゐました。佐治谷者の與太は親類の

ことでありましたから早速手傳ひにと急いで其家に來ました其家では大層喜んで「與太さんよく來て呉れた。早速だがお寺へ行つて和尚さんに親が亡くなりましたから佛事萬端よろしく頼みますと願つて來てくれ」。「よろしい。しかし和尚さんは寺の何處よゐられます」。「和尚さんは寺に入ると少し高い所があるだらう其處に居られる」

與太はテク／＼寺にやつて参りますと本堂の高い棟の上に烏が止まつてゐます。與太はこれが和尚さんだナ。黒い法衣を着てゐるがと思つて「和尚さん、親が亡くなりましたから佛事萬端よろしく頼みます」と云ふと、烏は「子カア子カア」と云つて啼きます。「子ではない親で」と與太が云ひますと相變らず「子カア子カア」と云つて啼きます。與太は仕方ありませんか

ら歸つて此事を話しますと

「それは和尚ではかい、烏と云ふ鳥だ。仕様がないな二階から酒壺を下して呉れ」

與太は二階から酒壺を持つて階子を一段下りると酒が「トプトプ」と云ひます。與太は「跳ばないでもよろしい」と云つて又一段下りると「トプトプ」と云ひます。「とばないでもよろしい」又一段下りると「トプトプ」、與太は「そんなに跳びたけりや跳べ」と云つて手を放しましたから大變、壺は破れてそこから酒一ぱい。「仕様のない與太さんだナ飯を焚いて頂戴」と飯を焚かせました。與太は竈の前に坐つて釜の下を焚いておましたか「クタクタ」云つて蒸ぬ出しました。與太は恐り出して「食ふものか食ふものか」と云つてゐます。釜の中ではクタクと

云ふ 與太は「食べはしない食べはしない」と云つて喧嘩をしてゐます。

あゝ與太さん喧嘩はよして風呂の下を焚いて貰はうか」

與太は風呂の下を見たが薪がない「何を焚きませうか」と聞く

と「何でもそこらにあるものを焚いて下さい」との事であつた

與太はそこらにあつた下駄、傘、手桶までも焼いて了ひました

。た膳を差上げることには仕様といふので奥の間で和尚を上座に

與太も相伴といふのでズラリと並びました。與太はこんな膳

に坐つた事がない。どうして食つたら可からうと心配して居ま

したが、これは何でも和尚のなさる通りを眞似するに限る。さ

うしたら間違はない。と和尚の方ばかり見てゐると和尚が箸を

とつた。與太も箸をとつた。どうしたはずみか和尚のつまんだ

芋が箸をすべつて座敷中をコロコロと転がると、與太は成程と感心して芋を箸で取つては座敷中にコロコロと転がらせた。と

やがて佛事もすみましたので與太もいよいよ佐治谷に歸ることになりました。

其家からは御苦労であつたと言ひ、團子を爲て食はせました。

與太は團子を食つて見たところ、これがこれまで食つた事のないも

ので味が忘れぬ心のうちに歸つたら是非此のものを拵へて食

つて見たいと思つてゐました。

そこで其名を聞いて見ると團子と云ふことが分つた。

やがて其家をお暇をして歸ることになりましたが、團子といふ

事を忘れてはならぬと心得て道々「だんごく」だんごく」云

つて歸つて行きます。一足歩つては「だんど」二足歩つては「だんど」と云つて通つて行きました。道に一筋の溝がありました。これを跳ばねばならぬ。與太は精一ぱいの力を出して「ひよい」と跳んだ。跳んだは可かつたが跳んだ調子に團子と云ふことを忘れて了つた。ハテ何であつたやらと思案をしても思ひ出せぬ。漸うにして「ア、ひよいであつた」と今度は「ひよい、ひよい、ひよい」と云つて飯つて行きます。「ひよい、ひよい、ひよい」とうとう自分の家まで飯りました。與太は飯るや否や家のものを呼んで「今日はひよいと云ふものを拵へて食はせる」といひます。家のものは分りません。與太は「早くひよいと云ふものを拵へよ」といひます。家のものは如何しても「ひよいが分りません。與太は大層恐つて「ひよいが

分らぬ事があるものか」とそこらにあつた火吹竹をとつて女房の頭をなぐりつけました。「家内は吃驚して團子のやうな瘤が出たが」と申しますと與太は「ア、其團子のことだ」と云ひました。めでたしく

◎ 大坊主

因幡國徳尾の森といふがあります、こゝには其昔相撲で有名であつた野見宿彌が祀つてあるのであります、さて徳尾の森といふのは老木が生ひ茂つて居て晝も暗いばかりであります、晝さへ物凄いであれば夜などは一層物凄いで、誰いふとなく徳尾の

森からお化が出ると云ふ評判が高くなりました。でありますか
ら夜などは此森へ行くものがない、もし夜の十二時過ぎて一時
二時頃に此森を三度まはると屹度何か化が出る、云ふ、ほん
とに出るか出ないかは知らないが中々三度廻つて来るものはな
い噂はますます高くなつて徳尾の森はますます物凄い所となつ
て了ひました。

こゝに鳥取藩に羽田半彌太といふ荒武者がりました。徳尾の
森から大坊主の化が出るといふことを聞いて一つ其正体を見
現はしてやりたいものだ。又運よくばこれを退治てやらうと考
へました。そこで或日の夕方から我家をブラリと出掛けまして
徳尾の森の附近まで来ました。と見ればそこに一軒の茶店があ
ります。半彌太は其茶店を叩き起して

「御亭主、一つ夕飯を畢はして貰はうか」
と這入り込みました。亭主は力強さうな半彌太をつくつく見
てゐましたが「此夜陰に何處へた出になりますか」と聞きまし
た。半彌太は

「ソレ徳尾の森で大坊主とやら、化とやらが出るさうだから
其正体を見届けて来うと思ふのだ」
と答へると、亭主は「それは結構な事で御座います、此節は化
化が出るといふので女子子供、大人までも恐れ込んでゐます、
貴殿のお力で化を退治下さるなら人々の幸福此上は御座い
ません どうか御大切に遊ばしませ」と親切に申しました。

半彌太は此茶店で、したゝかた腹をこしらへ亭主に別れをつ
げて出て行きました。亭主は「化歸を待つてゐます、どうか御

無事でモ一度此茶店に御立寄り下さい」と、門を出て半彌太を見送りました。

半彌太は茶店を出てしづくと森の方へ近附いて行きました。夜はだんく深くなり木々の梢の風はなる音がヒューくと物凄く鳴つてゐます。半彌太は何にして剛膽な武士でありますから少しも恐れません。森の入口まで来てキツト森の奥を睨め上げますと。山のやうな森は眞つ黒い聳えてゐます。半彌太は静に歩調をとつて石の段を一つ上り二つ上りだんく奥深く這入つて行きます。しかし何にも出て来る様子はありません。大分奥深くまで進み入りましたが少しも變つた事はありません。

半彌太は、そこの石に腰を下して「何だ馬鹿くしい化かんか少しも出て来ない」

と獨言を言つてゐました。ところがサツト怪しい風がふくと不思議不思議突然に出て来た。半彌太も一寸は驚きましたが、少しも恐れませんでした。大坊主だ、丈は雲つくばかり高く眼は爛々と光つてゐます。半彌太は見上げ見下して、さても不思議なものがあるものだ、化と相對つてゐました。化も半彌太が恐れられないから張合がよいと思つたか、らんが掻き消すごとく消へて失くなりしました。

半彌太は化物を見届けた。此上は歸らうと思つて森を出て、もと来た道にひき返しました。が來がけに立寄つた茶店のこと、を思ひ出し茶店に立寄りまして

「亭主、歸つたぞ」

「に歸りかさいましたか、御無事で結構で御座いました。し

て化物は出まして御座いますか」

「出たよ」

「どんな化物で御座いました」

「大坊主であつた」

「どんな坊主で御座いました、こんな坊主でしたか」

と亭主は手を擴げて坊主の眞似をしました。

「もつを大きな坊主であつたよ」

亭主はそれを聞いてゐられたが、自分が直ぐに大坊主になつて

「こんな坊主でしたか」

と云つた、半彌太が亭主を見ると亭主ではゐなくて徳尾の森で見

たよりは一層大きな恐ろしい大坊主であつた。森の中で大坊主

に會つて驚かなかつた半彌太も今此亭主の大坊主をみて吃驚仰

天しました。

多分此茶屋の亭主は徳尾の森のた化であつたのでありませう

其後茶屋と亭主もありませんでした。

◎赤松池物語

伯耆國大山の麓に赤松村といふがあります。昔此村に赤松某といふものが住居してゐました。何一つ不自由なく暮してゐたのでありましたが、たゞ一人も子供が無いのが此上もない嘆で

ありました。そこで赤松某は自分の村近くに在る湖水に出で、毎

をとり、子供を授かりますやうと祈りました。其祈りが届いたのでありませう、程なく一人の女子を設けました。父母は大層喜んで蝶よ花よと育て上げましたが、此子も亦賢い子で父母の命令を良く聞きます。だんぐく生長くなるにつれて姿も嬌しく顔も可愛らしく、緑の髪はフサくと艶があり、まことに類の少い少女となりました。父母の喜びは譬へ方もありません。だんぐく年月を重ねて少女が十八歳となつた秋、赤松の父母少女は、かつて水垢離をとつて祈つた池に願開きに來ました。此池は澄み渡つた水が少しも塵埃を交へず池の底までも透徹て見ゆるかと思ふばかりであります。少女は此奇麗な池を目を放さず眺めてゐましたが不思議に池の中から自分を招くやうな氣が致しました。少女は何だか恐ろしい氣分になつて踏跟としま

した。父母は「和女、氣分を確實に持てよどうしたか」と云つて池の水を飲んで口うつらに飲ませました。ところが少女はバツナリ眼を見開いて池の底の方を飽かず眺め入つてゐます。父母は「コレ如何したのか」と氣を付けますと、少女はシクシク泣き出して「今私か水を飲ませて戴きましたら、池の底まで見透されるやうになりました。彼の水の底に見てゐる邸宅はあれが眞正の私の邸宅であります。父母方には見れませんか、私の父母も彼處にゐます……」と云ひます。父母は驚いて「コレ何を云ふのか」と身體を揺りましたが、少女は「アレ私の邸宅で、私を招いてゐます、私は行かねばなりません」

とソツと父母の顔を見ますと赤松の父母は少女の様子が變つたので驚き悲しんで只管泣きに泣いてゐます少女は「阿父さん阿母さんには多年養ひ育てられた大恩があります。この御恩は決して忘れません。假令私が何處へ到りましても側に離れずにゐます。しかし今は私の眞正の邸宅で呼んでゐますから……………」

と池の中へザンブとばかり這入つてしまひました。

其後、池の面はもとの静さゝ歸りましたが、父母は水の底を眺め入つて立たうとしませぬ。時に池の中から小さい金の蛇が現はれて來まして水際をサツと通つて行きました。父母は不思議な事だと思つて更に水中を見ますと、水底に美しい宮殿が建ち並んでゐます。三葉四葉に建て列ねた家、金銀珠玉、珊瑚琥珀

珀を綴めた構。其中に我子の姿がナラと見えました。父母は「ア、残念な事だだが我子は彼のような立派な邸宅へ行つたのだ。嘆くまい悲むまい」と言ひ乍ら尙も泣き悲しんでゐます。スルト先の金の蛇がスル〜と水上を通つて行きました。アツと思ふ間もなく宮殿は掻き消す如く消えて、もとの湖水が水も静かに澄み切つてゐます。

赤松某は悲しみ乍ら自宅に歸りましたが其後は家運も榮へて來、幸運も向つて來ましたので豊富に暮したと云ふことであります。此時から此池を赤松の池と稱へます。

◎ 經藏坊

今は昔、鳥取城の久松山に一疋の狐がゐました。狐は中々悪
 がしこいものでございませうが、この狐は至つて柔順しい、智慧
 のあるのでございませう。其名を經藏坊と申します。
 經藏坊は久松山に住んでゐるのでありますから其處の殿様に仕
 へて殿様の御用なら何でも叶へるといふ忠義者でありました。
 經藏坊が一番よく勤めることは飛脚の代りをするのであり
 ました。昔は今と異つて交通が不便ですから何一つ用事があつ
 ても飛脚といつて人の使者を立てねばなりません。其節は絶へ
 ず江戸との間に用事がありましたから、飛脚は江戸と鳥取との
 間を往來します。しかしいくらよく歩くものでも二百里の道で

すから七日や八日には行き着くことが出来ません。ところが經
 藏坊は二百里の道を二三日で往復して來ます。殿様の御手紙を
 戴いて江戸に出でそして、それを御屋敷に届け返事を貰つて歸
 つて來ます。

ある時、いつもの様に殿様の御使となつて江戸へ向けて鳥取
 を出發しました。そして駒返峠を通り越し美作、播磨など云ふ
 國を通つて行きかゝりました。

播磨の國まで來ますと、ポンと鼻をつく妙な香ひがいたしま
 す。「ハテ今のは何であつたのだらう。」と、思案をいたしました
 が「いや今は殿様の大切な御用をつとめてゐるのだ。外の事
 を考へてはならない。」と思ひ返して又進んで行きませう。
 しばらくすると又ポンと鼻をつく香がいたします。何の香かし

らん 考へて見ますと。何が扱、焼鼠の香ひであります。焼鼠は狐の大好物であります。「ア、焼鼠の香であつたか、大方罨が造つてあつて其餌に焼鼠がかけてあるのだ。恐ろしやくゝあの焼鼠を食つたら最後命はないのだ。さつさと行きませう」と思つて、足を早めて進んで行ききました。

足を早めて行きましたが、又どうしても其香が鼻をついて来ます。元來が好きな焼鼠でありますから、未練が残つたのでございませう。「まだあの焼鼠の香がしてゐる。少し許り食つて見たいナ。しかしあれは罨だ。食つてはならないのだ。」と。又行きかけましたが、「いや罨に限つたこともあるまい。一つ行つて試して見ませう。」と。折角、行き過ぎてゐましたが、又引き返して焼鼠のある所まで歸つて来ました。歸つて見れば

旨さうな焼鼠であります。經藏坊は食はうか食ふまいかと思案してゐましたが、畜生の悲しき、つい食ふ氣になりました。一口食つた。旨いと思ふ間もなく罨にかゝつてしまひました。鳥取では經藏坊が歸つて来ない。どうしたのであらうと。法印を呼んで見て貰ふと播磨で罨にかゝつて死んだ、と云ふことが分りました。

殿様は大層氣の毒なことに思はれ、矢つ張り罨にかゝつたと。久松山の中腹に小さい祠を立て、こゝに祀つてやられました。

◎ 打吹山

伯耆國東伯郡に羽衣石山といふがあります、峰は高く雲をいたゞき麓には東郷池が堪へて、誠に景色のよい山であります。此山に一つの大きな石があつて、この石を羽衣石と呼びます。これについてには次のやふな話があります。

この羽衣石山はまことに景色のよい神々しい所でありませう、時々天女が天から下りて来て休息いたします。天女は美しい大きな石を好んで其上で舞ふのが、何よりもの樂であります。此山の石も奇麗な磨いたやふな石でありますから、此石に下りて来ては羽衣の袖で石を軽く打ち、打つては空中に舞ひ上ります。

或日いつものやふに羽衣石山に来て羽衣を纏して舞つてゐましたが少々疲れたと見えて羽衣を其石の上にかけて木蔭に寝んでしまひました。

こゝに此近くの農夫でありましたが偶々此山に上つて見ますと、石の上に見訓れぬ美しくい着物があります。農夫は「これは美しい着物だ、天人の羽衣といふものかも知らん」と思ひ、手早く其着物を奪つてサツサと歸つて行きました。

天女は目覺めて其處らを見ますと、脱いで置いた羽衣がない。風が奪つて逃げたのかしらと彼方此方を探りましたが見當りません。泣き悲しんでおりましたが、何處からとも無く。

「和女は暫時の間、人間界に住ま無ければならん。何年かの後に白い花の咲いた蔓草の下で子供に救はれるであらう。」

と云ふ聲がしました。ところが不思議や、これまで天女であつた乙女はスツカリ天上の事は忘れて全くの人間となつて了ひました。たゞの人となつて見ると衣服が薄いので寒さを覺へて來ます、だんぐに腹が空いて來ます。羽衣石の山の上に居ても少しも食物とはありませんので乙女はスゴくと山を下り、人里近くに來て食物を求めました。さて惑農家まで來まして食物を求めますと其家からは老齡の婆さんが出て「マア氣の毒な、見れば舊は立派な姫さんらしいが、大層寒さうで座いますこと。に腹も空いたのでせう、どうか遠慮なく召上んなさい、着物も立派なのではないが差上げませう。れ差支なければ私共の宅へに留りなさい」と親切に云つて呉れました。此家はこの羽衣石山で羽衣を奪つ

て歸つた農夫の家であります。しかし農夫も婆さんもこれが天女であることを知りません。天女も固より自分が天女であることは忘れておました。

天女の乙女は此農夫と夫婦にかつて此家に久しく暮しました。が、其中に二人の可愛らしい女子を設けました。

子供はだんぐ成長しましたが、二人の子供は非常に親孝行で、父母の仰せは未だ一度も背いた事はありません。又樂しみとしては音楽が大層好きで、笛、鼓、鐘、笙、箏、篳篥の類誰も教へないよ上達して來ました。うして何時も父母の望によつて之を奏して其心を慰めて居ました。

或日、此農家の人は一同揃つて倉吉の神坂といふ所に遊びに來ました。其家を出る時に農夫は

「宅に餘程以前から一枚の着物が大切にしている、今日は一同も楽しく遊歩に出るのだから、これを姉に着せやう」と云つて。かの羽衣石山で拾つて来た羽衣を着せて出掛けました。

さて一同は神坂まで来まして此處で休息まうと云ふので。芝の上には休みました。此時姉の少女は。

「今日は私こんな着物を着てゐるから。舞ひませう和女は笛を吹いて」

と妹の少女に笛を吹かせて舞ひました。妹は「私も舞つて見ませう」と姉と入替つて舞ひました。此時天女の母親は舞の手を見て居ました。

「その手の伸し方が少し拙い、妾が教へて上げませう。少時そ

の羽衣をお貸しなさい」と云つて、羽衣を身に着けました。羽衣を身に付けて舞ひかけますと最早人間の心は悉皆失くなつて、忽ち羽衣石山の磐石の上に休んでゐた時の心持になりました。同時に身體は軽くなつて、空中に浮んでゐます。子供は驚いて

「ア、阿母さん。どうしたのです。今一度、降りて下さい、ア、阿母さん」

とオロ／＼してゐます。母親の天女は「妾は、全く忘れてゐましたが元來は羽衣石の山にゐた天人です。今、はからず、何も彼も分りました。其時、妾の羽衣紛失なつて、それきり人間になりましたが、今も今として羽衣とし知らず此着物を着たればもとの天人とわかりました。二人

の子供も伴れて行きたいが天上には人の子の住む所がありません。白い花の咲いた蔓草の下で子供に救はれると聞きまじたが、もし其處らに白い花の咲いた蔓草は有りませんか檢べて見て下され、もしあつたら、是きりの御縁と斷念めて下さい、ずいぶん身體を大事よ」と云つて、遠く高く天上に消えて行きました。見れば鳥井の側に一つの井戸がありました夕顔の花が白く咲いてゐます。

二人の女子は「ア、仕方がないせめてあの山の嶺に上つて音楽を奏したら阿母さんの耳に届くかも知れない。阿母さんは音楽が大層好きで在つた」と此山に上つて姉妹の子供は笛を吹き鐘をならして母のあとを慕ひました。しかし天上の人は再び地下の人とはなりません。永く打吹山の音楽の響のみ残つて哀れ

を後の世に傳へました。打吹山といふのは此時から名けた名であります。

◎國分寺の犬

今は昔因幡國岩美郡の國分寺に一疋の大が居ました。此犬は國分寺に飼つてゐると云ふのではありませんが、残飯があれば呉れてやりますので何時とはなく國分寺に馴々しく來るのであります。

此國分寺から程遠からぬ所に法華寺といふ寺があります。國

分寺に行く犬は又此法華寺にも來まらして僧侶の餘り物を貰つて
 めましたから、丁度兩方の寺で飼はれてゐる有様でありました。
 寺の法によりますと、食事の時又は鐘を撞きまです。何時とは
 なしに犬は此法を記憶まして鐘が鳴つたら食物が貰へる事と思
 つて待つてゐます。もし國分寺の鐘が先になつたら國分寺へ行
 つて食物を貰ひもし法華寺の鐘が先に鳴つたら法華寺に行つて
 食物を貰ふと云ふことに決めてゐました。
 ところが或時國分寺の坊様と法華寺の坊様とは相談して「彼
 の犬は何時も鐘の早かつた方へ來るが一つ同時に鐘を撞いて見
 やうではまいか、もし國分寺へ行つたら國分寺の犬としやうし
 ても法華寺へ來たら法華寺の犬としやうではまいか」と約束
 しました。

そこで此日眞晝時、驟し合せて同時ニ鐘を撞きかけました。
 犬は兩寺の中程で遊んでゐましたが、鐘の音が聞けたので國分
 寺の方へ行かうとします。スルト法華寺の方の鐘もなつてゐます
 又思ひ返して法華寺の方へ行かうとします。スレバ又國分寺の
 鐘が耳につきまです、何方にせうか、彼方が此方かと兩寺の間
 を彼方に駆け此方に駆け何方とも決まりがつかせせん。遂に迷
 ひ迷つて迷ひ死に死にました。兩寺の僧は「氣の毒なことをし
 た」と塚を造つて葬つてやりました。犬塚と稱へてゐます。今
 も何方ともつかないものの事を「國分寺の犬」だと云つてゐま
 す。

●ととん女郎

今は昔、氣高郡の立見峠といふにねとん女郎といふ狐が住んで居まして、人をばかし、頭をくるくると刺りねとすことゝ度々ありましたので、村の人達は皆之に困りました。

ある日、村の庄屋の家で、村の者どもを招いては酒が初まりましたが、色々の話の末に例の狐の話が出ました。

主人の庄屋が「誰なりと彼の狐を退治する人があるなら褒美をやらうが、誰か退治する者はあるまいか」と云ひました。

するとその席に居た若者二名は、かねく少しばかり力のあるのを鼻にかけて居る連中でありましたが、「それを退治するなんどは朝飯前の仕事です、私等も屹度、退治した目につけてます

と受合ひました。が、座中の人々は、皆あやしい事だ、よせばよい位に思つて内心で笑つておました、なぜなればこの人達は少々経率であつたからであります。

二名の若者は、この晩、家に歸りますと直ぐ、鎌を腰にさししこ踏んで立見峠へ往きました、すると果して、黄金色をした年より狐、形状は犬程に思はれますのか、ぶらぶら歩きしてゐます。

太郡作は、つのもれ治郎作に向つて「居た！居た！」と話しかけますと、治郎作も「居た〜。あんな奴に騙されてたまるものか」と合槌をうちます。そして暫時見て居ますと、狐はハツと變つて若い婦人化け、それから道端の小さい石地蔵を抱きあげ、谷川の水草を付けたかと思ふと直ぐに赤兒に變へて了ひま

した。そしてそれを背中にねんぶしました。

二人の若者は「こいつ、どんな事をするか見てやらう」と、その跡について往きました。狐は一向、氣付かない様子でありました。

何町か往きますと、ある家につき、戸を叩いて開けて貰ひ、そこに入つて仕舞ひました。

「畜生、何してゐるか」と戸の隙から覗いて見てゐますと、爺さま婆さまが、大層喜んで今の婦と赤兒をもてなしてゐます様子、全く子や孫と思つてゐるらしくあります。

二人の若者は此様を内て思ひますには、「可哀そうに、爺さま婆さまは、狐にはがされて居るのだ、どうかして教へてやりたい」と、尙様子を見てゐます中に婆さまが外へ出ましたので

太郎作は走り寄つて「實はこれ〜でござる」と、告げましたが、婆さまは少しも信ぜず取り合ひません、治郎作も口を添へて今見たあらしを話しましたが、婆さまは、どうしても承知しません。だんぐの外、聲が高くなりましたので、家の人々は何事が起つたのかと、出て来て、「どうしたのだ」と問ひました。太郎作と治郎作とは、さきの事を繰り返し「今この家に入るのは、狐に相違ありません」と云ひましたが、家の人々も、氣狂だらうといふて取り合ひません。太郎作、治郎作も仕方なく「それほゞ私の言ふことを疑ふなら、今の赤子を釜に入れて煮てごらんさい、すぐ現はれます、あの赤子は實は石地藏であります。私があるこれいふ程のこともありませんから」と云ひました。こゝに至つて爺さまは少し疑つて來、姿さまの

止めるを聴かず、釜煮よして見ました。すると赤子は釜の中から大声を出して泣き出した。幾ら煮ても矢つ張り赤子でありましたので、太郎作、治郎作は、怖くて怖くて、どうしたらよいかわからなくなつて來ました。爺さまは眞つ赤になつて怒り「この野郎、太い奴だ、何の遺恨があつて、おれの可愛孫を殺した。さあ只は代けない、奉行所へ訴へてやるから一緒よ來い」

と手を引いて無理に連れ出しました。

太郎作、治郎作はまつ青になりましてブルブル震ひ「どうぞ救して下さい」と地べたに、座りこんで動きません。が、爺さま婆さまは聞き入れず「どうしても奉行所に訴へなければならぬ」と力んで居ります。

この時、丁度こゝを通りかゝつた和尚さんがありました。年はどつてあましたが、珠數を手にし、お経を誦みながら來ましたが、今この騒ぎを見まして「何事だ」と尋ねました。家の人々も今斯く斯くのことと、仔細を語りますと、和尚は法衣の袖口を掻き上げながら

「われは素と、衆生を濟度し、慈悲を施し、善恨を樹つるを止めとして居るものでござる、この場合只は過ぎられませぬ。皆々よう聞かされ、この太郎作、治郎作を罪よれたとした所で一度死んだ子供は、また生きはらない、で、この若者を奉行にやつて罪人にするよりは、寺に入れて法師にして死んだ子の爲めに冥福を祈らせるがよいではないか、さすれば死んだ子も浮ばれる道理、どうでござる」

と懇に説いて聞かせましたので、爺さま婆さまも、その道理に感じて拒まれもせず、僅に二人を許しました。和尚は「善は急げといふから」とすぐ二人をつれて道を引返し、寺に歸り「この様のことの起るのも前世の因果快く佛門に歸依するがよい」とよく説ききかせ頭を刺つて坊さんにしてやりました。二人は坊さんになつて木魚を叩き、赤子の爲めに念佛を稱へて終夜弔んでやりました。

時過ぎて、「太郎作やあい」、「治郎作やあい」と大きな聲で頻りよ呼ぶものがありますので二人は驚いて目を聞いて見ますと最早夜は明けてゐます。和尚も、寺も無く家もなく爺婆もかくあたり茫々たる草原の中で村のものが貳人を捜してゐる聲でありました。「こゝはどうしたのか」と、大いに怪み手で頭を

すりと撫でて見ますと、いつの間に剃られたか、一本の毛もありません、手に持つてゐるのは竹の先に馬糞をつけたものでありました。これ全く例のれとん女郎が化かして、髪を剃つたのでありました。

◎盗人の悔悟

今は昔、米子町に正直な爺と婆とがありました。爺は毎日朝早くから田圃へ出て働らき婆は畑に出て野菜物をつくりて、かつく世を送つてゐました。しかる正直ものでありますから多くの人に大事にせられてゐたのであります。

こんな正直な爺と婆とでありますに、世の中には随分悪くも
のりあります、或夜盗人か此家をねらつて入つて來ました。爺
は物音をききつけ、これは必定、賊がはいるに違いない。た
のれ許すものかと身構へして待つておました。

そのうち婆も目を覺して見ますと此仕末であります、婆は爺さ
まをたし止めました、さて賊に向つて、

「ようこそ、た出になつた。さあ。ずつと入りなさい」

賊は此聲を聞いて見付けられたと思つて驚いたの驚かないのつ
て、跡をくらまして逃げ出さうとしました。婆はこれを止めて
「いや、驚かれる程のことはない。定めし暮し向に困つてあら
れるのだらう、遠慮するには及ばぬ。」

といふと。賊は逃げるにも逃げられず、もちぐらゝしてゐます。

婆は

「晝、來ることが出來ないで夜分た出になるのは、よくく仔
細のあることであらう。出來ることから澤山のお金も上げ九
いが御承知の通りの貧乏家だから貯蓄といつてもない。しか
し飯などはこゝに澤山あるからこれでも食べてお腹をこしら
へなさい」

といつて飯を食はせました。賊は塀の壁を破つて入つたのであ
りましたから、婆は其塀のくづれを指して、

「ア、彼處の壁が破れてゐる、明朝、近所の人が見付けると
面倒だ、大儀ながら元の通りに繕ふから手傳ふて下され」

と云つて壁のやぶれを元々の通りにしました。
爺さまは始終だまつて見てゐましたが、婆さまが色々と賊に

話して聴かせる様子を見又賊が感心して婆さまの云ふことを聴くのを見て思ひました。

「私も悪かった。盗人だからと云つて悪い心ばかり持つてゐるものではないか。それを私が打つてやらうと思つたのは悪かつた。元々よい人間なのだ、是は親切にしてやらねばならぬ」と言つて奥へ行き少し許りの貯蓄の金を持出して、賊の前に置き、

「何か御馳走でもして上げたいが、夜中のことで何もすることが出来ないこれは少しだが酒手にしなさい」と云つて賊にやりました。

賊は打たれるかと思つてゐましたに、今此爺さまと婆さまの親切な語に感じて、自分の悪かつたことを幾度もくく申しました。

た、

「まことに濟まぬことでありました。今こゝで打たれ擲かれたつて、何共申し様がありませぬに、御親切な教をいたゞき又御金までも戴くと云ふは何たる冥加にあまることでありませう。これから後は、キツト改心いたします。再び泥棒など致しませぬ」と誓ひました。

後久しく此泥棒は姿を見せなかつたのであります。が數年の後立派な商賣人になつて澤山の土産物を持つて、正直爺さんの所へ御禮に來たといふことであります。

●夢

佛

今は昔、伯耆國日野郡笠木村といふ所に夜な夜な田圃の中で光る物が出るとの噂が高くなりました。村人は不思議に思つて「如何したのであらう、何れ此邊に光物が出る譯は無いが、此近邊は一面に田圃だ、何れもある筈がない」と、より／＼評議をしてみました。村人の誰さんは見たと云ふ。又しても分らなくなつて、其光り物の出た所へ、二三人して行つて見ましたが、何れもありません。「これは晝だから居ないのであらう、今夜は屹度化物の正体を見届けやうではないか」と村人の若者二三人は相談を纏めました。

さて夜にゐると屈強の若者五六人で、光り物の出るといふ七曲り田と云ふ所へ来て見ますと、泥の深い田の中で何やら光るものがあります。「光り物が出たぞ、皆しつかりせよ」と先の一人が云ひました。皆鳥渡吃驚しましたが、光り物は動きも何れもありません。「何だ此光り物は、些ども動かないでは無いか」「ハテ何であらう」「不思議だ」と見て居ります。時に氣の利いてゐる一人が「これは生きて居る者ではないゾ、衆して行つて見やうではないか」と先に立つて、泥の中を踏んで行つて見ました。見る所が泥の中に一体の佛像が埋まつておりました。「ヤ化物かと思つたら佛像であつた。これは何か仔細があるに違ひない。兎も角、大切に持つて歸らう」と、五六人は之を村に持ち歸つて、多くの人にも見せ、小さい草堂を造つてこゝに安置しておきました。しかし何様仔細があるか分らないでおまし

た。

こゝに米子本教寺の住僧に日要といふものがありました。或夜不思議の夢を見ました。金色燦爛たる佛が現はれまして、「其方が教化を以て世の人を導かんどもらば、すべて身につけてゐる泥濘を拭り除かねばならん。今世の中の總ての者は泥濘に塗れてゐる、佛すらも泥濘に塗れさせてゐるのだ。其方は如何思う」との御告があつたと思ふと夢は覺めて汗はしどゞに流れてゐました。日要は目は醒めました。如何も夢とばかりは思はれません。世の中の人皆泥濘に塗れてゐるのだ、自分も泥濘に塗れて居るだらう、佛さへも泥濘に汚してゐる、勿体ないことである。深く考へに沈みました。する中に夜が明けて、朝の鳥が威勢よく鳴き渡ります。寺の門を開かせやうと思つて

あると、門の開くのを待たないで戸を叩いて来たものがありました。「何誰か」と聞きますと出雲の船頭だと答へます。何用あつて此寺へはと聞きますと、船頭は静に」

「私は出雲の船頭であります。松江城下の桔梗屋小左衛門といふ人から依頼まれて来たのであります。日野郡阿毘羅村に靈佛があるさうであります。今は粗末を堂に安置してあります。すが、あの佛は由緒のある佛でありますから、速に堂宇を建立して靈場といたしたい。それに就ては自分も及ばずながら寄進も致しませう、御力よくなりませう。との傳言がありました」

と申しました。

日要はこれを知りて、扱は夢の告と云ひ、此船頭の語る所と

云ひ、尋常事では無いと思つて、米子では中尾善右衛門に相談し、又此使者を起した松江の桔梗屋小左衛門に相談して共に日野郡阿毘縁村に行つて見ました。阿毘縁村は笠木村から四十町ばかり離れた所であります。話を聞いて見ると笠木村で泥濘塗れの佛像を小さい草堂を建て、安置つてゐることゝ分明ました。日要は此佛こそ例の夢に見た佛様ではないかと思ひ當りました。そこでいよく之を阿毘縁村に移して堂宇を建てる事と決めて附近一帯を勧進して見ますと、忽ち多くの財寶が集まりましたので、立派な伽藍を建て甲斐國身延山久遠寺日境上人の弟子の日感上人といふを開基として解脱寺と名づけました。時は慶安三年の事でありませす。

抑、この佛像は、昔日野中將が罪を得て此日野郡に流されました時、中將の縁故の人に日靜上人といふがありました。佛像を一軀中將に與へて「此佛像は祖師が自ら造られた所のもので此外に日本に唯一つしか無いものである。よく信仰なさるやうに」と云つて渡されたものであつてありませす。其後、中將は死にかり、何時とはなく、佛像も捨てられて七曲り田の泥の中深く埋もれておられたのでありませす。此時、佛体の垢を悉く除き潔めて解脱寺に安置される様になりました。それより此寺は、だんぐ榮ゑて、此寺は詣づるものは身の垢を去つて清潔な身体となり心の泥汚を去つて本の善い心になると語り傳へてゐませす。

人形山

伯耆國から美作國へ越える峠に人形山と云ふ峠があります、東伯郡になつてゐますが、昔此山に一疋の大きな蜘蛛が棲まつてゐましたが此蜘蛛は至つて悪い蜘蛛で往來の人に向つて難題を吹き掛け、もし蜘蛛の言ふことを聞かねば皆殺して喰つてしまひました。其難題と云ふのは通行の人に向つて琴を弾けよと云ふのであります。

この蜘蛛は何時でも此山を通る人は一人も遁さじと張番をしてゐまして、もし弱さうな者が通ると、ツト路の真ん中に出て「此處を通ることはならない。もし通りたいなら、此の琴を弾け」

と云つて大きな眞つ黒な琴を持ち出します此琴といふのは古木の株に蜘蛛の粘り強い糸を張つてゐるのでありますから、此糸に觸れると粘に鳥が喰付いたやうに離れませぬ。弱い旅人は詮方がありませんから、手を一寸琴に觸れる、スルト最早手が離れませぬ。

蜘蛛は「手で彈らねば足で弾けよ、それも出来なければ喰ひ殺すぞ」

と言ひます。旅人は又詮方もく足を觸れると又粘り付いて離れませぬ。これは皆蜘蛛の計畧で、手も足も琴に粘り付かせて置いてソロ／＼長い糸で身体中を縛り付けて、少しも動けなくして了ふのであります。

こゝに麓の村に伶俐な一人がいました何と云ふかして彼の蜘蛛

を退治やうと思ひ、種々思案の末木の人形を拵へ、自らは毒矢
 を持つて、峠に出掛けました。そして蜘蛛の氣の付かない間に
 人形を峠に立て、置いて、自分は木蔭にかくれて様子を窺つて
 居ました。スルト蜘蛛は、「また良い獲物が來た」とノソノソと
 琴を持出し

「早く琴を弾かないか、弾かなければ喰ひ殺すぞ」と
 と言つて居ます。しかし其人は木偶でありますから何とも申し
 ませぬ。蜘蛛は此奴馬鹿だな、橋にしてやりませう」とね得意
 の長い糸を出して徐々巻きにかゝりました。かの賢い村人は、
 「此時こそ蜘蛛を退治する時だ」と思つて矢の毒を十分仕懸け
 弓を満月の如く絞つて蜘蛛の胴中見掛けて、プスリと射放ちま
 した。蜘蛛は不意を打たれて周章狼狽、人形を其儘にして急い

で己が巢の土の下に逃げて行きました。

さて、村人は急いで歸つて此事を他の村人に告げ知らせ峠に
 上つて見ますと、蜘蛛の血の痕が着いて居ます。乃で衆のもの
 は手ん手に武器を持つて血の痕を傳つて蜘蛛の巢に行つて見ま
 すと見るも恐ろしい眞つ黒な大蜘蛛が、毒が循つたと見ぬて苦
 しがつて居ます。村人は「多年人々を苦しめた黒蜘蛛、思ひ知
 れ」と斬るやら打つやら遂に此惡蜘蛛を退治してしまひました。
 此時から此峠を人形山と云ふとの事であります。

●湖山長者

今は昔、氣高郡に湖山長者といつて有名な金持家がありました。住宅は立派に建てなべて何一つ不自由といふ事はない、所有の田地は見渡す限り廣々として稻の波をうつてゐる。僕婢は澤山使つて金銀財寶其數を知らぬ食ふに方丈八珍の食あり、衣るに錦繡綾羅あり、といふ生活をしてゐました。

ある年の夏のことでありませす、丁度田植の時分となりましたので、其廣い田地に田植をさすといふことになりました、されば家の者ども近在近郷の者どもは、今日こそ湖山長者の田植の時だ、と勇みに勇んで、手拭をかぶるやら、裳を端折るやらしてかひなくしく田圃に出て行きます。長者は自分の家から其目

も届はぬ程の廣い田圃を見渡して、ひそかに自分の富と力とを自慢してゐました。

さうするうち晝になり夕方になりましたが、名にしれう長者の田地でありますから植えても植へても果しがありません。とうとう、日が暮れかけてしまひました。

長者は此有様を見て「今少し日が入らないと田植がすむに、残念なことだ」と思つて居ました。やがてつと立つて金の團扇を取つて來ました、そして日に向つてこの團扇を開き三度招きました。

ところが今しも山の端にかゝつて沈まんとする日が、三段ばかりズツと上つて來ました。長者の勢力は甚いものであります、入日を麾いて之を止めました。さて田植の方では日が暮れ

かけてゐましたに又明るくなりましたから、思ふまゝに捲つて残らず田植を爲してしまひました。

其日は無事に暮れました。皆の人達は疲れて心地よく睡みました。長者も満足して睡みましたが、夜が明けて見ると、どうでせう、さしものに廣かつた長者の田地は跡かたもありません。見事に植付けた稲の影さへ見ゆません。たゞ廣々としたる湖水であります、どこから湧いたともなく奇麗な水がたゞへて漣がザワ／＼と立つてゐます、植付けた稲は池の端に芦とあつて動いてゐます。この池は湖山池と云ふのであります。湖山長者の土地は日を麾いた罰で一夜のうちには湖水に化けてしまつたのであります。

◎人助の熊

今は昔、伯耆の國日野郡に九衛門といふ樵人がありました。ある年の冬、いつものやふに山に入つて薪を採つてゐましたが、今年は殊の外に大雪で馴れた山路ではあります、路も分らない位になりました。其内に日暮になりましたので九衛門は足元の見ゆる内に歸りたいと大急ぎで歩きました。其せいか足をふみ外して幾十丈とも知れない深い谷底に落ちて積れる雪の中にからだを埋められて起ることもどうすることも出来なくなつて了ひました。

九衛門はあまりの事におどろいて、一旦は氣絶しましたが、暫くしてゐると温い手でなでられるように思つて息をふき返し

ました。が四邊を見ますとまつくらで手にさばるものは雪ばかり一度死んで又活き返つたのを思へば喜ばしいに違ひありませんが、この上はどうすればよいのか心元なく思ひました。

夜はだんぐくとふけるばかり、氣が氣でありませぬので、手さぐりに雪をかきわけやうとしますと、何だか分らぬ生ぬくいものをつかみました、「何だらう」と考へますと、ぞつと怖れて齒もカチカチと震ひ鳴り、生きた心地はいたしません。大きい熊の手を握つてゐるのであります。

それにしても不思議なのは熊は荒々した様子もなく、手伸べて九衛門の口の邊に當てます。九衛門が思ひますには、「こうなつてはどんなに氣をもんでも、これの命は熊次第、おまじ敵對して殺されるよりは、どうせ死ぬなら、これとなく一命

をさし出さう」と決めました。又、熊は。夏の日に手の平へ蟻をつけてたいて、冬の備へにするとの事も聞いて居ましたので若しやと思ひ、そのさし出した手の平を怖々ながらめて見ますと、大層甘くあります。又なめましても熊は怒りもしませんので、頻りになめますと、これ腹のひもじさも自然に忘れる程であります。

熊の様子で考へますと、我を害しやうなどの、心は無いらしいと信じまして、少しは安心しました。そして其案内について、岩穴の中に入り熊に身をひつけて、一夜をあかしました。

あくる朝起きては見ましたが天地四方たゞ眞白の雪ばかりで何れが自分の家の方とも當てなく、もしや人聲でもしないかと耳をすまして聞いて見ましたが遙か下の方で谷底に、どうく

と瀧の水の響く聲より外は、小鳥の聲さへもきこえません。仕方がありませぬので、毎日熊の手をなめて、何十日といふことなく暮しました。しかし家へ歸りたい、家へ〜と思はない日としては一日もなかつたのであります。

ある、日和のよい日でありました。熊が九衛門の袖をくわへて引き、ついて来いといふ風に見へますので、其まゝ従いて一里ばかり雪をふみ分けますと、初めて人の足あとある所へ出くはしました。そこに至りますと熊は用が済んだといふ風で、元來た方へ歸らうとしますので九衛門は熊のからだを抱きつきすがりつき、「お前は私の命の親、情ない獵人に見付かつてあなた命を無くすなよ」とかき口説いて別れましたが、いとゞ別れを惜まれて、熊の山合に隠れるまでは。のび上り〜見送りま

した。

これから、やつと自分の家に歸りましたが、家には村人が大勢集まつてゐて、何か法事の様子でありました。今、九衛門が入つて來たのを見るより、皆々、「それ幽霊が來た」と、にげるやら、かくれるやら大騒ぎになりました。

九衛門は合点ゆかず、之れをおし止めまして、「私は幽霊でもなんでもない熊に助けられてこれ〜」と初めて今日までのことをすつかり語つてきかせました。すると皆々は

「今日は九衛門どんが家を出てから四十九日め、もう此の世にない人どあきらめられた寺の和尚を頼んで法事をしようとしてたのんだ」と云ひますので。

「それなら法事の代りよ、歸つた祝の酒もり酒もり」と九衛門が先きになつて、大酒宴を催し、家の人々は勿論、村中の人まで喜ぶ歌ひ和尚さんさへ法衣をぬいで酒をのみ、夜のふけるも知らずいであつて賑かに陽氣に祝ひました。

さて村人達は九衛門の話ときいて熊の親切に感心し、これからは村の獵人は熊を捕らない様に仕様ではないかと相談して、これからは一切熊を獵らないことに決めました。

又、九衛門はあの山の熊は私の命の親であるといふので、毎年、其山の熊に、色々の食物を持って行つて大な岩の上に置いて歸るのでありましたが、其後、九衛門は其熊に一度も出會ひませなんだ。しかし九衛門は死ぬるまで熊の恩義を忘れなかつたといふことであります。

◎ 千兩箱

今は昔、鳥取の殿様が政治をなすつてゐる時のことでありました。一人の役人がありましたが此役人は御政治向が錢を預るの職務でありました。其お錢は至極丈夫な堅い箱に入れて口には堅く錠をねりし、亦其上に封印をきつて、どうしても、開かない様にして保存するのであります。だから盗人などが少しでもさはると封印が破れますから直ぐに分ります。

ある時、殿様から、かねて預つてゐるお錢を出せよとのことでありましたから役人は早速封を切つて出しましたが不思議なことに、金銭が足りません。しかし誰も手を出して奪つた痕もありません。役人はこれを見て不思議に堪へられませんが自

分の職務の失態でありますから切腹して申譯をすると云ふことに
にかりました。

こゝに蛙町の邊に一人の婆が貧しく暮してゐました。ある時裏
口よ一疋の狐が來ましたので食ひ餘りの飯を呉れてやりまし
ところ。次の日にも亦來ます、婆は又食物を與りました、こ
の様にして毎日狐を可愛がつてやりました所が。狐は其恩に感
じたものか度々小判を持つて來て婆の家に置いて行きます。こ
のやうでありますから婆の家はだんぐ／＼富み榮えて暮し向いゆ
たかになりました。近所の人たちは此有様を見て不思議に思ひ
ました。より／＼噂して、「どうしてあの家は勝手がよくなつ
たのだらう」と云ひました。此噂はだんぐ／＼ひろまつて殿様の
御耳にはいりましたから殿様は此頃奉行に預けて置いた金銭が

紛失をうが一つあの婆を調べて見ようと思はれまして婆を呼出
してに調べになりました。

婆は正直ものでありますから何一つかくす所なく自分の家へ
毎晩、狐が來ることから、其狐に食物を與へたこと、狐が大そ
う喜んで、時々は小判を持つて來て置いた事に至るまで、残る
所なく申し上げました。

殿様はこれは、全くこの狐の仕業に相違ないと思はれました
から早速、奉行の切腹するのをとゞめさせ一方、法印さんに頼
んで此悪い狐を國外に逐ひ放つてしまふと云ふことになさいま
した。法印は法の力を以て此悪狐を封じて國內にゐることは出
來なくしました。狐は仕方ありませんから棲みなれた土地を
去つて知らぬ他國へ行くことゝなりました。

狐は他國に行きました。どうも故郷が忘れない何とかして歸りたいと思ふておました。

さて話は元に歸つて、婆さんは元々通り貧乏な暮しをしておました。此頃毎夜夢を見ます。かの以前から馴れてゐた狐も来て「どうか私を歸らせて下さい、今後は屹度悪いことは致しませんから」と頼みます。婆は毎夜この様な夢を見ますから其狐が可愛相にあり、此狐を歸らせてやらうと思ひました。或日さきの法印の處に行きまして狐に悪いことはさせないからとだんぐ／＼頼みました。法印もこれを聞いて、あはれに思ひ「では飯らせてやりませう」と承知しました。

法印は殿様の處へ出てこの婆の云ふことを遂一言上し、さてあの狐は元は悪い事をしたのであります。今は後悔して正直な願ひたうございます。と申し上げました。

殿様は仁慈深い方でありましたから「前の悪い事を後悔して善い狐になつてゐるなら飯してもよからう」と仰せられました。そこで法印は先の術を解きました。

狐は術を解いて貰ひましたから飯りて來ることが出来ました。狐は喜んである日、婆さんの所へ御禮に來まして。

「御蔭で。飯ることが出来ました。この御恩は決して忘れません。禮の申し方が御座いませんから一つの術を傳授いたせませう」

と云つて、封印を切らずに中の手紙を讀む術を傳へました。この狐は封印を切らずに金を取り出す程のものでありましたから

以前から此術を知つて居たのであります。
 其後、婆の家はだんぐ、幸福がよくなりました。この狐は鳥
 取蛙町の三妙院にまつられてゐると云ふことであります。

◎下女のね種



今は昔、因幡國宮下村といふ所に、名高い長者があ
 りました。其界隈きつての長者でございませうから、多
 くの田畑山林を所有し、又多くの下女下男を使用し
 て、何不自由なく裕かな生活をしてゐました。
 或時、細川村といふ所から一人の下女を雇入れました。此下

女は頗る美目よく顔かたち何一つ点のうち所のない嫵致よしで
 ありました。此長者のうちでは夜になりますと、多くの下女下
 男せ、仕事に済みませうから、大勢が、圍爐裏の側へ集まつて、
 世間話を初めます。かの嫵致よしの下女は、たねと云ふ名であ
 りますが、衆のものには、たねさんくと云つて可愛がつてやり
 ますのでたねも悦んで衆の人と色々の話をするのが例でありま
 した。
 多くの下男下女が集まると、時には、何か旨いものを食
 はうではないか、と云ひ出す者があります。すると、忽ち其相
 談が纏つて旨いものを食べるのであります。種も何時も此相談
 にのるのであります。或日又此相談が纏つたのでありましたが
 たねは、ふと、主人の家を出て何處かに行つて了ひました。

暫くすると、多くの柿の實を持つて歸つて、衆の者に食べさせました。衆は大そう旨がつて食べたのであります。

この様にして、たねは、度々何處からともなく柿の實を取つて来て、下女下男に分つて食べさせました。初めの程は、誰も不思議には思はなないのであります。度が重なるにつれて皆々不思議の思をする様になりました。

或日、いつもの様に、たねは。柿の實を取りに行きました。かねく不思議に思つてある下男は。「今日こそ何處から柿を取つて来るか見届けてやらう」とたねの跡を追うて。見急つかくれつ従いて行きました。

所が、たねはそんな事とは夢にも知りません。湯山村の種ヶ池に着きますと、池の中に入り、泳いで池の中にある小嶋に着

いて其嶋の柿の木に、よぢ上り、其實を探りました。

下男は三人まで従つて来たのでありましたが。此有様を見て吃驚し、顔の色は、土のやうになり、手足もブルブル震ひ出し、丸から周章て、自分の村をさして歸つて行きました。そして、息を切つて申しますには

「たねは種ヶ池にすむ、蛇であります、美人と思つたのは、實は蛇でありました」と途切れに主人に知らせました。

主人はこれを聞いて非常に驚きましたが、さうする事も出来ません。たねは自分が怪物であることを見付けられたので、其夜ぎり二度と主人の家には歸りませなんだ。

ところがこの主人の家は、たねが去つてから奇妙に不仕合もつゞいて起ります。たねが居た時は、何もかも幸福ばかり續い

ておましたが、たねか居なくまつてからは絶えず不幸つゞきであります。音に聞けた長者でありましたが、山林、田畑、等もだく／＼と賣り拂はなければならぬ様にありました。

こゝに同じ村に又、一人の長者がありました。前の長者の山林、田地等を悉く買ひ取りましたが、此、長者の家へ、満といふ老婆がありました。此満といふ婆は但馬から出たものでありましたが、利巧なものであつたので人に敬はれてゐました。この満は、種ヶ池の話を知りて、不思議に思ひ、毎年、村の子供を集めて、種ヶ池に参詣します、そして小餅一斗五升を持つて行つて、木の葉に乗せ、一個づつ。池に投げ入れて、かの龍の女に献じますと、餅は池の真ん中に出て、渦巻の中に入り込んで底に深く入つてしまひます。人々は益々不思議の事に思

ひました。

或年の事でございました、非常な日和つゞきで、野も山も一滴の水さへありません、田圃の稻は枯れるのを待つばかりであります、この時、村の人達は長者に相談をいたしました所が、長者は「ともかく婆の満に相談しよう」と云ふので、婆に相談しますと婆は、承知しましたと云つて、早速、種ヶ池に行つて龍女に祈禱をこらしめした。多くの日、婆はこゝに籠りましたが、其の満願の日には大雨が盆を覆すやうな勢で降つて來ました、村人は非常な悦んで、多くの品ものを婆に贈つて礼を申しました。後、婆の満はだん／＼年とつて腰がゞみ手弱くなつて、池に通ふことも困難となりました、或時これが最後だと思つて種

ケ池に参籠しましして、いつもの様に餅を献じ龍女に向つて云ひました。

「妾も多年こゝに來ましたが、もはや年とつて歩行くことも出來ません、大方、これきりで此池に参ることは出來ますまい。されば何か不思議な事を見せて下さい」と祈りました。

暫くすると、どこからともなく風がサツト吹いて、四方の木々は時ならぬ音を出します。池の上一面は五色の波が動いて、水が湧き立つかと思はれるばかり、見てゐる中よ、池の中央から大きな水柱が立つた、霧は四方に立ち罩め、風は寒く吹き渡つて、こゝに龍女の正体を現しました。

婆は此有様を見て感じ、家に歸つて人にも話し聞かせ、自分

も思ひ出して、龍女の靈驗を信じ、事ある時には種ケ池に祈つたと云ふことであります。

267
939



▲發賣書目録

●及第準備書 代參拾五錢	●つゞり方代五錢
●山陰道昔話代八錢	●因伯市町村名早見代五錢
●因伯昔話代拾貳錢	●鳥取案内代廿五錢
●國民の財寶代卅錢	●鳥取市位數表代七錢
●因伯立志人物近刷	●山陰道史蹟近刷
●山陰鉄道唱歌代五錢	●鮮血二十士近刷
●地價表姓名錄代卅五錢	●縣下の現状代卅錢
●郷土摸範人物代拾五錢	●鳥取縣地理近刷
●隱德太平記 四冊モノ 參千頁	●鳥取市地圖代五錢
●郷土地理歴史代拾錢	

(和漢本)洋本・唐本・一切買入申候

鳥取市大工町筋
 横山書店
 (電話三〇九番)



生先修監

著者 因伯史話會
 右代表者 横山敬次郎
 發行所 鳥取市上魚町四十五番地
 印刷者 船越莊治
 鳥取市片原二丁目二十二番二丁
 印刷所 船越活版所
 鳥取市片原二丁目二十二番二丁

明治四十五年七月貳拾日 增補貳版印刷
 明治四十五年七月廿五日 增補貳版發行

明治四拾四年十月廿一日印刷
 明治四十四年十月廿六日發行

(代拾貳錢) 發行所 横山書店

鳥取市大工町筋
 電話三〇九番
 振替大阪四二六八

鳥取市本町三丁目 電話二一三番 山本尙文館
 鳥取市東町 電話二四三番 平木久松堂
 鳥取市大工町頭 電話二六五番 静觀堂書館
 鳥取市本町二丁目 電話四七三番 濱田光文館
 鳥取市東町 博進堂書館
 鳥取市西町 島田書館
 鳥取市上魚町 山本立林堂
 鳥取市立川 楠城東立館
 鳥取市本町二丁目 太田書店
 鳥取市吉西町 徳岡優文堂
 鳥取市米子尾高町 伯耆米子尾高町 電話一七五番
 鳥取市大工町筋 電話三〇九番 振替東京一九五一番
 今井郁文堂

◎鳥取縣各書店にありま◎

●鳥取縣立師範學校
●鳥取縣立中學校
●鳥取縣立商業學校
●鳥取縣立高等女學校
●倉吉中學校
●倉吉農學校
●米子中學校
●米子高等女學校

此の本は非常なる苦心の結果各村々資産家數千名の不動産を精しく取調べす附録因伯市町村名早見因幡長者の盛衰其他を掲ぐ近頃の珍本也

●毎年増補發行

入學及第準備書

問題 菊版貳百頁
解答 代參拾五錢

數年の試験問題に一々答を付け優等生勉強法試験前後の注意應用問題學校の様子願書手續等漏すなく掲載しあれば競争試験準備書中適書あり

◎大好評

地價表姓名錄

因幡の卷

中版貳百五十頁 送代四錢
代參拾五錢

▲地價五百圓以上所有者全部を掲載す

終

發行所 橫山書店 鳥取市大工町筋